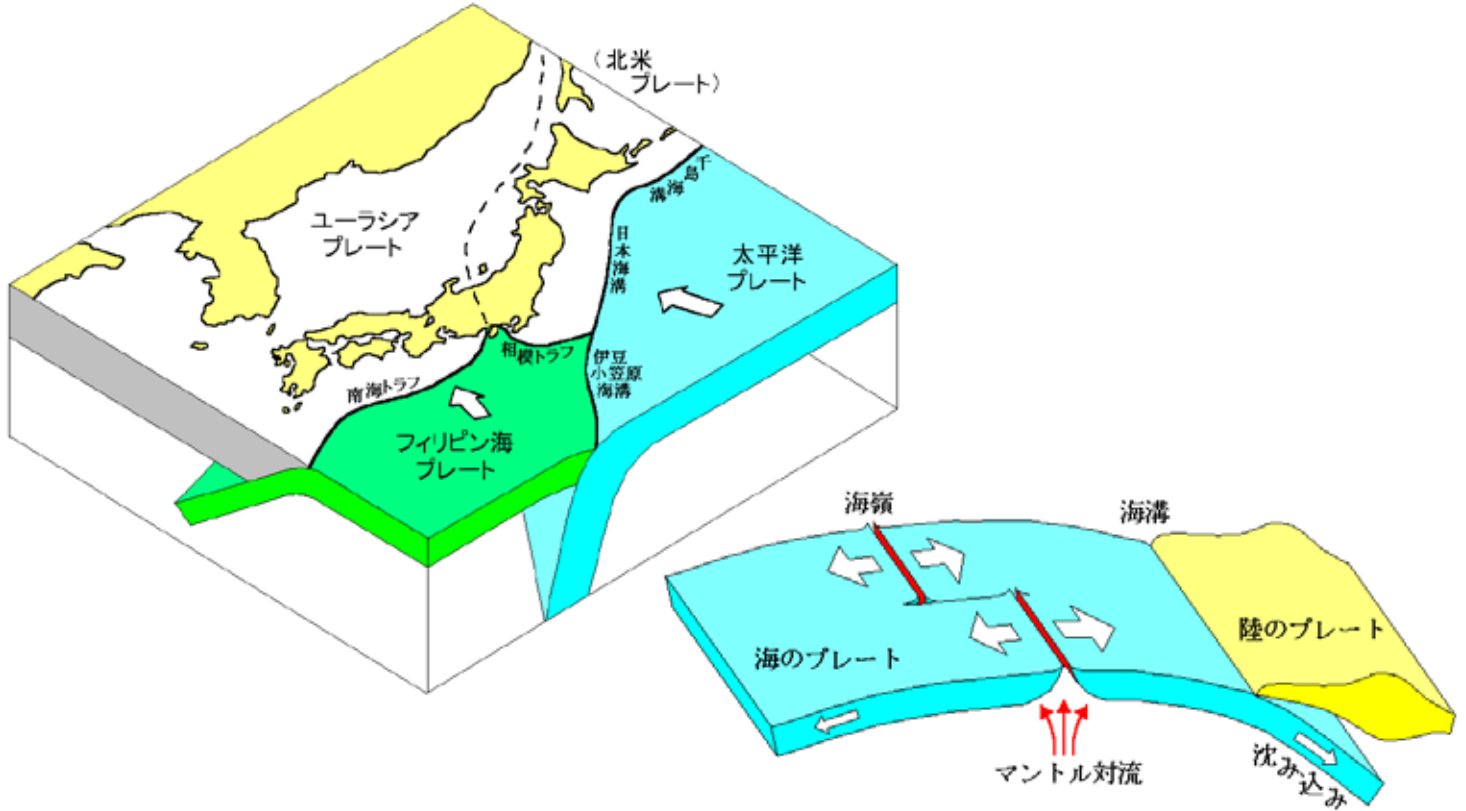


●白州だより

2011年9月23日
二十四節気 秋分
発行 白州郷牧場
山梨県北社市白州町横手 2259
TEL : 0551-35-4520
FAX : 0551-35-2970

白州郷牧場からの秋のおたよりをお届けします！ <http://www.hakusyu.jp/> info@hakusyu.jp



雑感：七月

白州郷牧場 代表 椎名盛男

1

日本列島は、4つのプレートの結節点。世界の地震の20%、火山の10%を「苦難を引き受ける選ばれた民」のように、この小さな島国が一手に引き受けて来た。それに加えて、日本には、四季があり、3ヶ月ごとに、生活様式を変えなければならない。実に多忙な民である。だからといって、誰のせいでもない。我々日本人は、地球に頼まれてこの列島に住んでいるのではなく、勝手に住みつき、つかの間の人生が終わるまでお邪魔しているだけである。

今回の災害で世界の人々を驚嘆させた日本人の「静けさ」はいったい何なのか。過日、韓国に行ってきた。そこでいわれたのは、泥縄式に陥っているだらしない政府と冷静な国民についてであったし、とりわけ「泣きわめかない子供たちの静けさ」であった。韓国でない他国の

人は「日本人は神も持たないのにどうして落ち着いているのか」ともいっているらしい。

その時、私はこう思った。私達の子供たちも哀しみを胸に抱いても、泣きわめかず、じっと運命に耐え、受け入れるのだろう、と。そしてこういう精神の在り方はどこから来るのかと考えたとき、この列島の宿命と四季の風土から来るのではないのか、深く関与しているだろうと確信した。

確信は、次のように飛躍もした。日本人は、今日のような災害に直面したとき、一瞬にして思考停止することを武道の達人のように体得しているのではないかと。上記のような自然風土に生きる日本人にとって、一神教の人々のように「絶対なもの」「永遠なもの」などないし、万物は流転するものであるし、方丈記の世界は、DNAの世界観といってもいいものだ。

だとするのなら違う言い方もできる。災害に直面したとき日本人は、一瞬にして前頭葉の活動を停止させ、古

代脳に身を預けてしまい「仕方のない現象」が過ぎ去るのを待つ。瞬時にして形而上の世界（無意識の意識）へ行ってしまう。諸行無常、無常の世界観は、そういうやり方で太古の時代からつくられて来たのではないか。世界（といっても先進国）の神を持つ人々を驚かせた日本人の静けさは、我々日本人のDNAに刻まれた形而上世界の飛躍へのプロセスと結果なのだ。

だから日本人は、万物の流転の時間を自らの身体に（脳に）取り込む文化的協同作業を春夏秋冬の中で繰り返し、美しさや、侘しさや、喜びを一期一会として刻み込む。村上春樹氏のいう美意識とは、そういう日本の風土と深く関与しているはずだ。

日本人は、言霊の国の民と言われるだけあって、実は形而上的思考、振る舞いが得意な民族ではないのだろうか。だから、他国の人々と比べても独特な世界観を持っているし、観点を持っているように思う。他国の人々にとって、国家は生々しく国家だろうし、男性は男性だろうし、女性は女性だろう。組織は組織だろう。けれども、日本人にあっては、そうでない。例えば日本人の男にとって、精神の基底では、女「性」観は形而上学化されており、生々しい性との折り合いを欠く。女性が形而上かどうか私は知らないが、現実として女性に妻性などない。にもかかわらず形而上的には厳然として、現実としてある。今日の災害で日本人は、自らが形而上学的に持っていた、国「家」観、「メディア」観、「学」者観、「官」僚観も崩壊したことを知った。国家とは、形而上学的に意識されたほど、立派なものではなかったのである。当たり前である。観念の中に現実をつくっただけのものだったのだから。

DNAに従うなら東北の人々を中心とする日本人は災害から復興するだろう。太古の時代からも災害に対し「仕方のないものとしての諦観」の時間を過ぎると再び前頭葉を活動するようリセットし、立ち上がって来た。今回も福島が悪魔にまとりつかれながらもDNAどおりに動くだろう。

2

村上春樹氏のバルセロナでの講演文章を読んだ。「我々日本人は、核に対する『ノー』を叫び続けるべきだった」と彼は言う。そして、広島、長崎と今日の福島が異なるのは、「誰かに爆弾を落とされたわけではなく、日本人自身がそのお膳立てをし、自らの手で過

ちを犯し、我々自身の国土を損ない、我々自身の生活を破壊しているのです」。この発言には異論のある人もいるだろう。「我々はお膳立てしたことなどない」と。しかし、我々がお金のために、便利さや効率のために、命と生活と家族の運命を引き渡し、文明を享受したことに、間違いないのだ。つまり、倫理と規範を捨てたのだ、

巧妙に仕組みられた原子力という核の列車に誰もが乗り、福島という地獄の釜に突入したのだった。そして、彼はいう。

「『安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませんから』という言葉に心に刻まなければなりません」と。わたしは、この原爆死没者慰霊碑の言葉に昔から、日本人らしい言葉の使い方だと欺瞞を感じてきた。日本人はいつもこんな言葉で問題をすり替えるのが得意だ。いつも主語を吹っ飛ばし、誰がどんな過ちを犯したのか、誰が誰に過ちを犯さないと誓ったのかもなくしてしまう。

3

それにしても、原発はサンフランシスコ条約にもう仕組まれていた。いかに中国革命（1949年）と北朝鮮の登場が、植民地売国政権と米権力にとって、深刻な権力体験であったことか、想像される。ために、労働者は労働三法を、国民は皆保険を、農民は農地解放で土地を手に入れた。しかし、そればかりではなかった。日本国民へのお土産はもうひとつあった。原発であった。導入に際してはCIAのエージェント正力松太郎が使われ、大衆的な政治バッターとして中曽根が使われた。こうして抜きがたいものとして、原発が日本に埋め込まれた。老子ではないが「欲しければ与える」となったのである。

4

一般国民をパニックに落とさない、一般大衆を混乱させないという政治的判断がすべてに優先すると政府関係者はいう。昭和天皇は「雑草という名の雑草はない」と言った。ならば、一般大衆とは何なのか。一般などという大衆はいるのか。この言葉は何なのか。思うには、この言葉の対極にあるのは「エリート」であろう。自分たちがエリートであることを証明する構図として一般大衆という概念が存在する。

そのエリートが絶対安全と行ってきた原発が福島で

何をしたか。正しくはこういうべきだろう。貪欲に犯された気違いエリートとそうでない圧倒的多数の人々（一般大衆）がいただけなのだ。自分勝手にエリートと称し、徒党を組み、マネーと情報の圧倒的非対称を作り出し、疎外した人々を、彼らが名付けたのが一般大衆である。我々が一般という殻を破らない限り、福島県と近県の人々は、20年くらいの時間をかけて、みえみえではないジェノサイド（虐殺）にあうだろう。こどもたちの大量死は三年後にははじまるはずだ。

5

永田町および霞ヶ関は比較的完全に液状化した。与野党問わず、誰が敵で誰が味方かかもわからなくなってしまった。問題の本質は原子力関連で汚染された政

治家、官僚と、そうでないものとの争いだろう。没落しつつある（した）電力会社と原発派は復活を願い、現状でいいと思う者は維持を望み、不満足な者は変革を志す。その争いが当分続くのだろう。菅直人はこの3つの勢力のうち、どれを代表するのか決めなければならない。財界も原発、脱原発に割れはじめた。応仁の乱は時間の問題である。我々は地方（辺境）において自己権力をうちたて、応仁の乱の時代に備えなければならないだろう。

民族文化の源流は郷村にある。家も、教育も、共同性も、みな田舎から都市に出て行った。そしておかしくなった。今、再び日本の立て直しを郷村からはじめなければならない。そうでないのなら、テロルの時代がやってくる。その先は、すでに歴史が教えている。

「く、くまあ……！」

若杉 俊明

8月5日、「きらら夏の学校」2日目の朝6時30分、いつものように鶏舎の窓を開け、餌を補給しながら採卵を行いに鶏舎内へ入る。何か、いつもと雰囲気が違う。床に点々と鶏が横たわっている。

「けものが入ったな。」鶏舎中央付近まで来て、産卵箱の前に横たわっている鶏を拾い上げようとした時、産卵箱の上から黒いものが降ってきた。ひょいとよけながら立ち上がると、真っ黒の物体に白い横一文字模様。

「く、くまあ……」口泡を吹きながら牙を剥き、両手を振り上げるツキノワグマ。産卵箱を乗り越えて飛びかかってきたので、持っていたコンテナで突き飛ばすように数発殴りつけると、熊は驚いたようで、鶏舎奥に走って行った。私は背中を見せないように逆方向へ背走、外に出た。

猟友会の井上貞二さんに電話して事情を説明し、夏の学校期間中なのできららスタッフに連絡して鶏舎に近づかないよう話した。

おっぱに亭に戻って朝食をとったが、みそ汁の具が口元からポロポロこぼれる。落ち着いているふりをしていたがかなり動揺していたようだ。

15分ほどして、井上さんから電話が入り、「とったぞ。」の声。襲った熊かどうか確認してほしいと



のことで、森の中へ入って行くと、井上さんが得意顔をして待っていた。

体長1メートル5センチ、体重65kgの若いオス。今の季節は、冬眠する冬を除いて、熊の食料となる木の実が一番少ない時期で、かなり痩せている感じがした。

自然の森と隣接している農場は、いろいろなけものが被害を与えることがあるが、熊ははじめて。後で産卵箱に付いた熊の最初の一撃の爪痕を見て、背筋が凍る思いがした。あまりお近づきにならない動物である。

夏の学校 2011 報告

内藤 光

今年もキララ夏の学校にたくさんの子供たちが集まってくれました。まず驚かされたのが子供たちのはしゃぎっぷり。特に初日は例年以上の大はしゃぎでスタッフ一同を驚かせてくれました。東日本大震災以降の重苦しい雰囲気から解放されたのでは・・・と思わず考えてしまいましたが、みんな元気でなにより。スタッフの方が子供たちからエネルギーを受け取ったような気がします。

今年は二日目に予定していた山登りが雨で中止に、また川の増水を警戒して川遊びの回数も減らすことになりました。特に困りものだったのがゲリラ豪雨で、川遊びの最中に土砂降りの雨に・・・なんていうハプニングもありました。というわけで今年は、畑での収穫や作業の時間が多くなりました。我先にとナスを収穫する子もいれば、カエルや虫に見とれている子もいたり、ずっと数を数えて、「ナスを〇〇個もとったよ!」と誇らしげに報告してくれる子もいました。また、鶏の「うんち」が野菜を育てるための重要な肥料になるということを説明して、みんなでナスの畑に鶏糞をまきました。みんなが肥料をまいた畑はその後もつやつやとしたナスを実らせてくれました。



プログラムでは、奥地先生が花崗岩ときれいな水の関係を、高校で物理を教えている高橋先生が電気の歴史について語ってくれました。また、イタリアン・シェフのアンジェロさんは、子供たちと一緒にミートソースのパスタをつくってくれました。

今回、特別講師として福島県で農業を営んでいた鎌田泰行さんにおこしいたき、津波に被災されたときの様子や、原発事故について語っていただきました。鎌田さんの話に耳をかたむけるときの子供たちの真剣なまなざしが印象的でした。

子供たちの荷物の整理整頓や衣類の洗濯がおろそかになっていたという昨年の反省をうけて、今年は日程の中頃で大掃除と手洗いで洗濯をプログラムに組み込みました。生活面ではまた、日々の夕食のおかずを一品、各班が交代で担当し、白州の野菜を使った料理に挑戦してもらいました。

最終日には「キララ祭」が開催され、各班が模擬店をだしました。お好み焼きやホットケーキ、焼き鳥などなど、子供たちが考えたメニューが並びました。またキャンプファイヤーを囲んでみんなで手をつなぎ、東日本大震災の犠牲者のために黙祷をささげました。

その他にも鶏舎での卵とり、牛の世話やジャガイモ掘りをしたり、早朝から森にカブトムシをつかまえに行ったりと、里山での夏を満喫していました。

「さようなら原発1000万人アクション」に参加しました。



白州郷牧場メンバー有志は、「さようなら原発1000万人アクション」(山梨県北杜市で行われた6月11日の「はじめのいっぽパレード」、9月11日の「はじめのいっぽパレード vol.2」)に参加しました。

パレードには約100人が参加し、「原子力のない世界へ」「子供を守って」などのプラカードを掲げ、「原発さようなら」「原発いらない」の掛け声で長坂駅前商店街などを歩きました。